



TITLE:

<大會抄録>水利と地域経済組織

AUTHOR(S):

斯波, 義信

CITATION:

斯波, 義信. <大會抄録>水利と地域経済組織. 東洋史研究 1977, 36(3): 487-488

ISSUE DATE:

1977-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153662>

RIGHT:

元朝の皇帝直轄領と北元の六萬戸

岡田英弘

元史地理志を見ると、帝國は中書省の直轄の腹裏と、十一の行中書省に分れ、それぞれ路・府・州・縣を領して、典型的に「中國」的な中央集權制度のように見えるが、これはもちろん錯覺である。元朝の實體は多數のノヤンたちの私領の集合體で、ノヤンの一人が皇帝に選ばれて、個人の收入で中央政府を運営しているに過ぎない。元朝がモンゴル高原に驅逐されたあと、残った主要なウルスは六つあった。これがダヤン・ハーンの六萬戸になるのだが、その一つはケンテイ山から大興安嶺、陰山、甘肅へかけて元代に繁榮した封建領の直接の後身である。

フラグ・ウルスの六王道

本田實信

ハムダラーフ・ムスタウフィーの『心魂の歡喜』(1340 A. D. 〔ペルシア文〕)の地理篇道里記には、第八代イルハン、オルジェイト(1310—1341)の新首都スルタニアを起點として「イランの地」の境界點に至る六本の王道 (shāhrah) が詳しく記されている。

この六王道は、スルタニアを起點とするフラグ・ウルスの驛站制 (Yām-Yānī) の整備を示すものと考えられる。

この六王道が、フラグ・ウルス内でどのように利用されていたか、それは當時の國際交通幹線にどのように接続していたかを調べてその機能を確め、さらにフラグ・ウルスにおける驛站制の沿革を論じてみたい。

水利と地域經濟組織

斯波義信

中國史において、唐宋時代に水利に關する農業土木開發が劃期的な發達をとげたことは異論のないところである。ところでこの水利問題の及す效果、影響を客觀的に判斷するためには、制度史や國家・在地勢力雙方の權利や利害の消長についての概括的議論のほかに、むしろ前提として解決を迫られる課題が存在する。かりに、舊開地においてより高次の水利の安定を志向する土木技術的發想が生じ、江南地域における如く現實に一定の安定狀況が唐、宋、元、明にかけて將來されたとすると、そこには當然に、植民定住、都市化を含む居住空間、生態的環境そして人口密度の變化が豫想され、水利の果す機能や、立地の制約する技術條件や、新舊開地間の人口シフトの程度差などのヴァリエーションを示しながらも、究極には新しい水利開發は當該地域の社會經濟を再編して行ったに相違ない。本報告では、浙江北部の地域經濟の具體例を中心として、地域レベ

ルでの客観状況を掌握し、地域間の比較、さらには全國規模での議論のための一現實モデルを提供しようと思う。

日唐軍制比較研究上の若干の問題

——軍防令と西域出土文書——

菊池英夫

日唐兩國制度の研究、特に律令研究が相互の比較史的觀點および史料の相補の利用によつてはじめて成果を擧げうるというのは、古くからの斯界の常識である。軍防令を中心とする唐代前半期の軍制について云えば、仁井田陞博士の『唐令拾遺』（昭八）中の軍防令復原は全條に互つてこの方法を採用され、濱口重國博士の『府兵制度より新兵制へ』（昭五）も隨所に日唐兩制の比較に言及されている。しかしその後の研究の展開を通觀すると、日本史研究者が律令制度を論ずる際に必ずと云つてよいほど母法たる唐令に言及するのに對し、中國史研究者は日本律令制度研究の進展に比較的無關心であつたといえる。ひとつには、石尾芳久氏が「名望家軍」と「家産制的國家軍隊」という概念の枠組で日唐兩制の比較を試みたのを別とすれば、日本史研究者の關心が、遡つて大化前代以來の傳統社會の固有軍制と律令軍團制との連續性如何という軍團制成立史論となるか、或は軍團制崩壊すなわち律令軍制の變質から、在地軍事力の構造と、それを九世紀以降の國衙軍制が如何に編成するかを通じて、いわゆる王朝國家體制と武士團發生史を見通すという、日本的特質

の解明に集中し、およそ唐制とは無關係な方向を示すかに見えたからでもある。しかし日本史家の一部によつて、まさに日本的特質として論ぜられている特徴の中には、實はそれこそが唐制の一大眼目であり唐制本來の姿を寫し出していると云うべき諸點が少からず存する。このことは、日本史・中國史雙方にとつて更めて顧みらるべき問題點を提起すると思うが、それが日本的特質とのみ結びつけられるのは、ひとつには日本史家の間に唐制に對する誤解があるからで、仁井田・濱口兩博士の研究では問題限定の上から敢えて觸れずに捨象された側面のあることが注意されていないのである。兩博士の業績が偉大であるだけに、そこに述べられただけがすべてと受けとられた。かくて専らそれに依據した日唐比較論を展開された角田文衛博士の論文が今日も廣く影響を與えている。最も問題となる點は、中央十二衛と軍府の制度的關係および實戦力の發動としての「行軍」（日本史家のいわゆる征討軍・外征軍）の位置づけである。唐の行軍制度は西域出土文書によつてはじめて解明しうる點が大きく、仁井田・濱口兩博士の研究から漏れていた點があるが、逆に日本發老令文中に多く關係條文が存し唐制復原に役立てうる。しかし從來それが「行軍」という獨立の組織規定である點が見失われていたため見逃がされてきたのである。又日本軍防令を手がかりとする唐令復原に際しても、西域出土文書を傍證として活用することにより確實さを増しうる場合のあることに注意したい。最後に近年吐魯番出土の軍制關係文書の一つについて試釋をつけ加えて御批判を仰ぐこととする。